

背の小さい女の子が、手をつないで走って来るのが見え
ました。男の子は、手にかごと持っていました。

二人は、林の近くまで来ると、かごと地面に置きました。
女の子は、しゃがんで葉っぱを一枚つみとると、男の子に
差し出しました。

「どうかしら」

男の子は、いきなりそれを口に入れました。ほほをふく
らませて、もぐもぐとそしゃくすると、
「うん、こっちのがやわらかくてうまい。ぼくの思ったと
おりだ」

とうれしそうに言いました。

「来たかいがあったわね、兄さん」

「かいがあったとも。たくさんつんで、今晚は、タンポポ
サラダにしよう。母さんの誕生日だもの」

「そうね、何はなくともタンポポサラダ」

女の子は、歌うように言いました。

それから、二人は、しゃがんで葉っぱをつみはじめました。
林の中からそれを見ていた子ぎつねは、

「タンポポサラダって、どんなものだろう」

と思いました。そう思うと、もう、知りたくて知りたくて、
たまらなくなりました。

「お前は、知りがり屋だから、気をつけるんだよ」

と、母ぎつねに、いつも言われているのですが、もう、子

ぎつねは、そんな言葉などは、思い出しもしませんでした。
さっきまでは、母ぎつねの言いつけ通りに、林の中を歩い
ていたことも、忘れていました。

「もう、いいだろう、このくらいで。空が、もう、もも色
になってる。あつという間にだいい色になって、うすむ
らさき色になって、あい色になってしまふよ。もう帰らな
きゃ」

「ほんと、夕焼けどきは短いものね。帰りましょう」

二人は、右と左からかごとを持って、歩きはじめました。
もときた丘の方に、登っていきます。子ぎつねは知ってい
ました。丘のむこうでは原っぱがとぎれていて、その下
には町があるのです。人間の住む町です。二人は、町から来
たにちがいありません。

「町に行つてはいけません。町には、人間が住んでいるん
だよ。いい人もいるけど、こわい人もいる。もし、こわい
人にあつたら、つかまえられてしまふ。そして、もう二度
と山には帰つて来れなくなつてしまふんだよ。町に行つて
はいけないよ」

子ぎつねは、母ぎつねに、何度もそう言われていたのです。
子ぎつねは、思い切つて林から出ました。そして、体を
低くして、原っぱの草たけの高くなつてみるところにとび
こみました。首をのぼしてみると、二人のすがたが、少し
小さくなったように見えました。